

火星



平成19年4月号

七曜抄

(四)

山尾玉藻

亀鳴くと片手あげゐる埴輪かな

新しき靴よく歩く花いちご

湖に鴨ゐてけふの春の雪

鳥去んで父に大きなオムライス

ひと畝は紺の芽ならぶ雛の日
雛の日の日ざしに零れ松の塵
鮎挿しのもどつてゐたる雛夕べ
のつこみの湖の高さの肘枕
クローバに裸足となりし背広かな
待たされて楠の若葉に冷えゐたり

太白星

柳生千枝子

初明りして未だ夢の中に居り
初鏡八十路の我の母似なる
何時の間の八十歳や雑煮膳
初夢の中の父母笑み給ふ
弾初の琴爪華奢な指先に
銀ラメのマフラ―選び初句会
初外出や独りの家に鍵ひとつ

杉浦典子

襖絵の紅梅の端開けらるる
鴨たちも夫もねむりし水飲み

冬霧のにほひの猫を抱きあげし
嵐山の影を出でけり炬燵舟
松焚ける煙真直ぐに弓始
菰巻の縄の吹かるる湖の暮
なるやうになる寒の水飲みにけり

浜口高子

何はさて眉を描きたり今朝の春
神の前冷えし懷炉のしやちこぼる
獅子頭脱ぎし男の薄化粧
初風や一本箸を甘酒に
双六の鬼の目玉にすきま風
鱈ちりに曾^そ曾^そ木^ぎの波音高まり来
一面の雪に突つ立つ蓮の骨

火星作品

山尾玉藻選

笛鳴に夕日大きくなり初景色
大和郡山 城 孝子

鳩たち顔ありにけり初景色

恵方みち土竜の土を踏みてより

元旦の男の肩を楯埃

二月礼者まづ牛小屋をのぞきけり

大仏へ子を掲げゆく初御空
八幡丸山照子

南座の大提灯に霰かな

白足袋にゆづられにけり太鼓橋

冬薔薇鞆ひらけば喪服見え

波しぶき立つ年の瀬の葬かな

電車より見下ろす残り戎の灯
八幡大山文子

母の忌を明日に七草粥あつし

大寒の夜の茶の葉をかへにけり

天王山すでに明るき霞かな
 探梅や沖に降る雨見てゐたり
 鯉揚げし泥あはあはと嵯峨野かな
 単線のにぎはひにあり初不動
 ひよつとこの初手からかなし里神楽
 箸割つて大黒そばの三日かな
 ぎりぎりを日渡る楮かたの雪晒
 船端に藻の打ち寄する淑気かな
 眠る山映せる水の眠りたる
 山茶花をするとき羽音過りけり
 めいめいの影を揺るがす楳火かな
 夕星にまだ一ときの襦袍かな
 寒濤の虹となりたるしぶきかな
 綾取の女ダンブのコックピット
 三川を一気に渡る雪催
 フェリー便待つてをりたるおでん酒
 手から手へ渡して鴨の首なりし

大東堀志皋
 明石戸栗末廣
 神戸深澤鱻

選のあとに

山尾 玉藻

笹鳴に夕日大きくなりにつけり

城 孝子

無論「笹鳴」が夕日を大きくした訳ではない。作者は夕日を眺めながら、笹鳴にも耳を傾けていたのである。その内、笹鳴の「チャツ、チャツ」という小刻みなひびきと、夕日が沈みながらずんずん大きくなってゆくリズムが、相呼応していることに気付いたのである。自然をダイナミックに、且つ繊細に観照する眼は確かである。詩人の眼は何かを発見する。

波しぶき立つ年の瀬の葬かな

丸山 照子

年の瀬の葬儀に参列すると、どうしても特別な感傷にひたつてしまうものである。しかし、掲句「波しぶき立つ」の鮮烈な景には、人間のそんな感傷などたちまち掻き消されてしまうようなインパクトがある。同時発表作「冬薔薇袍にひらけば喪服見え」の写実と配合に、端正な詩的センスを感じる。

電車より見下るす残り戎の灯

大山 文子

作者は高架電車の中から、「残り戎」で賑う神社の灯を見つけた、ただそれだけの事、では決してない。この句の眼目は「残り戎の灯」にある。宵戎や本戎に参り損ねた人々が、なんとか残り福を授かりたいと願う、人間のささやかな思いを象

徴する灯なのである。作者の胸中にもぼつと灯がともしり、暫くは温かな思いに満たされたことだろう。秀作である。

船端に藻の打ち寄する淑気かな

戸栗 末廣

作者は新年ふと思いつて漁港まで足を伸ばされたのだろう。今日ばかりは、岸壁に寄せられた多くの漁船も休息し、今は鷗も波間に羽を休めている。全てが新年らしい趣を漂わせる中、作者が最も寿ぎの思いを強くした対象は、常と変りなく船端に寄せる変哲もない藻であった。平明な表現ながら、季語「淑気」の本意を確かに踏まえている。

手から手へ渡して鴨の首なりし

堀 志皋

鴨猟の景と思われる。表現からは、作者自身が鴨の首を他の人に手渡したとも、その景を偶然目にした立場であったとも解せよう。この場合は前者と解すべきだろう。後者の作者のちよつとした驚きに比し、後者から伝わるぐつたりとした鴨の重さや生温さに実感があり、インパクトの点で勝っている。「手」という媒体が大きく働いた作品である。

夜伽中うからやからに炬燵あり

松山 直美

冠婚葬祭でもなければ親族が一堂に会する機会はめつたに無い。そんな中、夜伽の、しかも炬燵と言うくだけた場に親族が寄れば、つい昔話に花が咲き、ちよつと盛り上がることもあるだろう。故人をきつかけに、とりどりに広がる思いを共有する場となってゆく炬燵なのである。不謹慎なようだが、そこに真実がある。

恒星圈

廣畑忠明

織田作もこの坂よりの冬夕焼
野球用具片寄せてある冬日向
寒禽や閉ざしてをりし貸ポート
鳥声のダムに影する冬木立
その中に初髪のおる砂利の音

野澤あき

深澤鱧

けつたいな年寄りふたり日向ぼこ
ぼんやりと生きてぼんやり花八ツ手
寒日和ぼかんぽかんと鯉の口
靴音の過ぐる寒夜の枕かな
寒日和米寿となりし男の背

羽毛流れ寄る産土の鴨の池
正月や嬰に雄々しき蒙古斑
ばばさまと坊主めくりの緋毛氈
百日の嬰にしだるる餅の花
ふるさとのおしくらまんぢゅう雁木市

波田美智子

堀志皋

にこにここと携帯電話三日かな
閑かななる大和三山初霞
笹鳴やCT画像異状なく
境内に猫の来てゐるとんどかな
初夢に母と会ひたし会ひしなり

早梅や娘に告ぐるごと一つ
ダンプカーの下に寝転ぶ比良風
冬銀河山に無音の音なりし
まつ白なつな着でありぬ初仕事
喰積の一万九千八百円

獅子座

山尾玉藻推薦

高橋芳子

何くれとつつつき頃のつるし柿
大寒の薔薇湯に六十路沈めけり
大神へ寒九の湯気の流れけり
寒晴の土手に座す人佇てる人

前田忍

鴉一羽天守の影を乱しけり
大正の玻璃の歪みや七日粥
獅子舞の上り框につまづけり
大年のシート真白く干されあり

竹内水穂

人の日の手の甲に書く覚えがき
煤逃にひるの天満の寄席囃子
寒紅をさして仏壇開きけり
料峭の街に踏み出す松葉杖

垣岡暎子

びんづるの足裏なできし根櫃の実
頭頂部ちよつと確かむ初鏡
ひと雨のありし運河の初景色
正面に天守閣あり冬木の芽

伊勢きみこ

老犬のしきりに嗅ぎし冬すみれ
こともなく日のあるうちの初湯かな
夫と犬ならば昼寝の四日かな
尼寺の十株十彩との寒牡丹

村上留美子

ジャケットの白着て跳べり潦
鐘楼の土滑らかや冬の雨
帚手にかはす御慶でありにけり
蕪蒸少し遅めの昼御膳

岩井ひろこ

川渡り来しいろざとの夕霰
ネーブルの葉裏三寒四温かな
練り切りの黒文字ゆかし寒椿
震るるや漬物石の傾ぎやう